



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	漁村における小中學生の生活構造の擴がりに關する研究
Author(s)	伊藤, 博
Citation	北海道大學教育學部紀要, 3, 15-43
Issue Date	1955-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28977
Type	departmental bulletin paper
File Information	3_P15-43.pdf



漁村における小中學生の生活構造の擴が りに關する研究

伊 藤 博

一 序 言

人間の生活には、一定の生活構造というものが存在することは、戦前、籠山教授が、生活時間調査の結果に基づいて提唱して以来（註₁）、生計費の分析を通して、或いは生活における履歴現象の発見に關する、籠山教授、中鉢助教授、奥村教授の諸学説によつて立証されるに至つた。（註₂）

生活構造は、ある生活主体とその生活環境要因の、相互連関關係の結果として、形成されてゆくものであり、したがつて生活主体が異なり、環境要因がちがうと、そこに色々に差のある生活構造が形成されてくる。

人間は、このような生活構造のなかで、それを通して、影響をうけ、規定されてゆくのであるから、人間について、その変化や、發達を考えると、かゝる生活構造から切り離されたものとして問題を考えることは、こつけいであるといつてよいであらう。

昭和 28 年、九州大学で開かれた第 12 回日本教育学会に於て、一般家庭と、貧困家庭の学童の身体の發育、學業成績、社会態度にどのようにあらわれるかについての研究が發表されたが、それによると、身体の發育には、両者の間に差がみられぬが、知能では、やゝ差があり、學業成績、社会態度では明らかに差があることが報告されている。（註₃）

この研究の結果について、籠山教授は、次のように説明されている。（註₄）

「では一体、この生活構造の差異と、學業成績はどのようなつながりをもつのか。われわれはここで次のような作業仮説をたてゝみたのである。

學級には 40 名の学童がいて、その中 35 名は一般、5 名が貧困者とする。一般学童の生活構造は大体近似しており、貧困学童のそれは、これときわめて異質的である。ところが 35 名の一般学童の生活構造が近似しているから、これが重なり合い調和し易いので、そこに學級としての共通な構造が形成される。われわれはこれを學級におけるパーソナリティと呼びたい。5 名の貧困学童の方でも生活構造が近似していて、そこにも別のものが少数派として形成されると考えてもよいし、貧困学童の方には何も形成されないとしてもよい。そこで教育活動がこの學級におけるパーソナリティを前提として行われ、これに即応したカリキュラム（生活構造を前提としたカリキュラムが所謂生活カリキュラムだと考える）によつて學習が行われると、一般学童はそのパーソナリティの中に入つているから、当然効果が上る。しかし、貧困学童はそのパーソナリティの中にはないから効果は上らない。或は両者のうけとる効果に差が生ずるといつた方がより一般論的であらう。

いいかえれば、貧困学童は一般的に形成されているパーソナリティにとつては、全く異質のもの

だということである。したがって、定まつた対象に向つて行われている教育活動は、このままで異質なものに及ばないとみるのである。ただ、この作業仮設には、二つの重要な仮定が入っている。

第一には学級において学童たちが形成する構造がこの学童のそれぞれの生活構造の重なりあい、又は調和体として成立するということである。学童が家庭生活を中心とした生活の中から出てきて一人の子供として学校に集まつて、そこでは学校社会の一員となるのだという従来古い考え方を排している点である。われわれの生活構造論では家庭生活におけるものと学校生活におけるものと一緒になつて形成するものを生活構造としているのである。

第二には、学級において一般的に成立している構造＝パーソナリティと全く異質な学童にとつては、その学級で行われる学習がまるで効果がないということである。そのことは精薄児を普通学級においた場合と、精薄児だけの特殊学級においた場合の比較研究によつても立証されだしている。われわれは多くの教育学者或は教育者のいう生活カリキュラムとは、身近な生活行動や生活技術を通して学習するというような末端の技術論ではなくして、生活構造に即したカリキュラムだと考えたい。そうだとすればカリキュラムが所謂生活カリキュラムであればあるほど、学級の中の異質者にとつては効果のないものになつてゆくと考えなければならない。」

ところでこの生活構造は、前掲の諸研究が明らかにしているように、主体たる人間とその周辺にある生活環境要因との相互関連関係の結果として形成されてくるものであるから、当然、生活主体たる人間を中心として、その周囲に一定の拡がりをもつて形成される筈である。いま、AとBの二人の人間を考えた時に、これが、同じ場所に住んでいたとすれば、その周辺にある、自然的・人間的・文化的環境要因は凡そ同様である。ところが、Aなる生活主体が、周辺の環境要因のいずれと相互関連関係に入つたかによつて、そこに形成される生活結果は違つてくる。例えばAがある行動をすることによつて、ある環境要因と接触し、また、ある環境要因がAに接近し、ぶつかつてくることによつて相互関連関係に入ることで、ある生活結果が生ずるのである。そして、このような特定の生活結果が、Aの生活の過程の中で、次々と形成され、蓄積されてゆくことによつてAに特有の生活構造が形成されるのである。従つて、Bなる生活主体の生活構造とは、当然ちがつている。

それで、Aなる生活構造の拡がり方、その構造は、Bなる生活構造のそれとは、当然異つている筈である。

私の研究は、この生活構造の差異を、拡がりの差としてとらえようとしたのである。そしてこれが、学業の成績その他と、いかなる相関関係があるかを明らかにしてみようと試みたものである。

前述したところで、この生活構造という概念が、所謂パーソナリティといわれるものと異つていることは、改めていう迄もない。

相異なる生活環境の中で、生活を通じて、自分の中に形成されるものが、所謂パーソナリティであつて、それは遺伝的可能性と環境的要因の相互作用によつて、形成された、全体的、統一的な、行動の一定の傾向性と考えられている。(註₅)

したがって、パーソナリティは、生活構造の中心たる生活主体にぞくするものである。生活主体と環境要因が、相互関連関係に入るに当つて、その主体のあり様を規定するものであつて、むしろ主体的要因である。これに対して、生活構造は主体と環境要因の相互関連関係の結果として形成さ

れるものであると考えられる。即ち、それは、全く別のものである。

私の研究では、パーソナリティは問題の外においたことを、あらかじめ断つておきたい。

註1 籠山 京著「国民生活の構造」昭和18年

註2 同 上「郵政部内職員の最低生計費」昭和28年

籠山 京・中鉢正美共著「家庭経済論」昭和24年

中鉢正美著「家庭生活の構造」昭和28年

籠山 京著「貧困と人間」昭和29年

奥村教授著「Engel 法則逆現象の分析」大阪市立大学家政学部紀要1巻1号 所収論文 昭和28年

註3 籠山・菊野・石田各氏 第十二回日本教育学会大会報告 昭和28年

註4 籠山 京「貧困家庭の学童における問題」教育社会学研究第4集 所収論文 昭和28年

註5 岡部彌太郎著「教育心理学」昭和27年

Allport, G. W. : "Personality" 1937

Murphy, G. : "Personality ; a biosocial approach to origins and structure." 1947

二 調 査 方 法

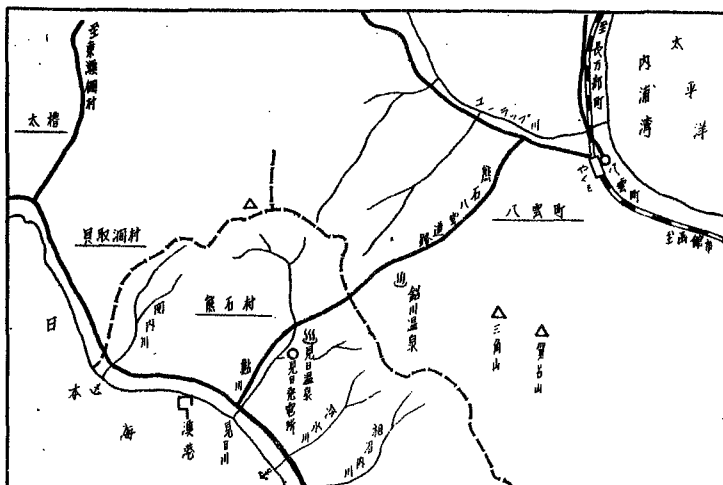
生活構造の拡がりを見るために、一漁村の小・中学校の学童を対象として、質問紙法によつて、その答を集計、整理して、生活構造の拡がり測定したのであるが、以下それらについて述べることにする。

(1) 調 査 地

調査地は北海道函館市熊石村で、北海道の西南部にある一漁村である。この村は下図に示すように、渡島半島のつけ根にある、日本海に面している村で、南北12軒、東西20軒に及び、戸数1,426戸、人口8,807人（昭和28年度）を数える。

村の産業構成を職業別世帯人口でみると、昭和27年度では次表のようになっており、漁家戸数が952戸で、全戸数の71%に及び、典型的な漁業村である。

この村には、鉄道の便はなく、鉄道所在駅である函館本線八雲、江差線江差、瀬棚線東瀬棚からバスで、山道を二時間乃至三時間ゆられてこなければならず、加えて冬期間は降雪のため、殆んど



輸送の便がないといつたへき地である。

人口動態は、昭和24年以降4年間の出生数は1,528人、死亡数は460人で1,068人が自然増である。ところが昭和24年の人口は8,501人、28年度は8,807人で、差引増加は306人である。これは、死亡以外に、他へ流出する人口があることを

熊石村、職業別世帯及び人口（昭和26年）

職 業 別	世 帯 数(戸)	人 口(人)	世 帯 比 率 (%)
漁業及水産養殖	952	2,816	71.0
却売及小売商業	100	214	7.0
サ ー ビ ス 業	58	168	4.0
運輸通信その他	50	104	3.5
農 業	46	402	3.1
建 設 工 業	31	44	2.2
製 造 工 業	29	55	2.0
公 務	22	45	1.6
金 融 及 保 險	21	41	1.5
林業及狩猟業	10	17	0.5
無 業	51	4,938	3.6
計	1,370	8,874	100

る漁村であることがわかるであろう。又漁家中には、漁船のない所謂無漁船漁家及び漁業労働者もいるわけで、漁家就労状況についてこれをみると次の通りである。

自 営 漁 業	600人	計 3,673人
共 同 漁 業	118人	(14才以上)
自 営 農 業	1,550人	
その他自営産業	38人	
漁 業 労 働 力	756人	
他産業賃労働	212人	
そ の 他	339人	

村別	熊 石 村	砂 原 村
世 帯	1,370戸	1,379戸
人 口	8,874人	8,345人
漁 家 数	952戸	621戸
漁 船 数	864隻	226隻
動 力 船	206隻	105隻
無 動 力	658隻	121隻

上の数字によつてもわかるように、漁家でも賃労働するものがかなりあることを示している。そして、この多くは船をもたぬ人たちで占められているのである。

一年間の総水揚げ高は（昭和28年）24億4千万貫であり、金額は1億3千4百万円で、このうち、ほつけ、すけそうたら、いか、の合計がそれぞれ総額の95%を占めている。漁期は一年を通じている。一方水産加工も盛んで、総生産額は1億4千万円に達し、するめとたら子はその6割を占めている。併しするめの加工などは設備が完備しているとはいえず、天日で乾燥することにたよつてゐるため、いかが豊漁で雨が降り続くときなどは、乾燥場に入りきれないいかが、漁家の軒先に雨ざらしになつて、どろどろに腐つてぶら下つており、その鼻をつくような腐臭が、海辺に沿つて伸びている街に漂よい、溢れていることが珍らしくない。

従つて、輸送の便が悪く、消費地から遠いこの村では、いかが大漁なときは、加工施設が十分でないために、むざむざ腐らせてしまつたり、他方雨が降らなくとも、需給のアンバランスによる値下りと、共販体制の未確立のために、買叩かれて、水揚げはしても、収入とならぬ所謂大漁貧乏といった現象を惹起することがある。

潮風にさらされた、白ちやけた小さな家々、その屋根には大小の石をのせて強い海風に吹きとば

示し、このような人口の流出は、道南地方の漁村を襲つている経済的窮迫のあらわれとみることができる。

漁船数は、漁家952戸に対し864隻でこのうち、動力船206隻、無動力船658隻である。この数字を丁度この村と背中合せになつてゐる太平洋沿岸の砂原村と比較すると（昭和26年）、下表の通りであるが、動力船に比して無動力船が多いこと、漁家数に対する全体としての漁船所有の割合が高いこと等から、この村は沿岸漁業を中心とす

されるのを防いである家々、家の中にまで、なわを張つて魚を干し、入り口の土間には、まだ濡れているゝはえ縄ゝがつみ重ねられている。このような家々が、すぐ後ろに山を負つて、細長く海辺伝いに、立ち並んでいるのが、この村である。

(2) 調 査 対 象

この村は、東西 20 軒にわたつている細長い地形の関係から、学校が多く小学校は三つ、中学校は二つあつて、本村には村立の定時制高校が一つある。

調査対象として、質問紙によつて、資料を蒐集したのは次の 5 クラス、187 名の児童生徒である。

雲 石 小 学 校	人数	男子	女子
五年三組	41名	20名	21名
六年一組	42名	18名	24名
熊石第一中学校			
一年A組	34名	18名	16名
二年A組	36名	19名	17名
三年C組	34名	19名	15名
計	187名	94名	93名

このクラスの選定は、本調査と並行して、学力調査を行つたので、それと合せるためにこれらのクラスを選んだのである。

(3) 調 査 資 料

利用した資料は次の 5 つである。

- (1) 生徒指導要録
- (2) 固定資産台帳
- (3) 漁船所有状況調べ
- (4) 熊石村勢要覧（昭和 26 年及び 29 年版）
- (5) 生活調査表

このうち(1)から(4)は既存の資料を利用したので、(1)は雲石小学校、熊石第一中学校、(2)(4)は熊石村役場、(3)は熊石村漁業協同組合で、夫々当局者の御好意と御協力を得て、整備したのである。殊に指導要録を初学年からずうつと先生方に、こちらで用意した用紙に写して戴いたのである。

(5)は、生活構造の拡がりを見るために、作成したものであつて、生活構造の拡がりが見られるような 21 の質問から成立つているがこの表については次節で詳説する。

(4) 調 査 表

生活構造の調査をするに当つて、最も大切なことは、どんな方法でこれを調べるかということ換言すれば調査表の作成であつた。パーソナリティの診断や学力の評価ならば、ロールシャッハ法、T.A.T. 学力テスト等の色々なテストの方法があるが、ここで把えようとするのは、生活構造の

拡がりであつて、その方法もこの目的に従つて、きめられねばならない。

それを把えるための質問紙法による調査表の内容も、複雑、多岐でなければならない。然しその全部を質問することはできないので、取捨選択がなされねばならない。そこで、学童の生活の拡がりのなかに、共通にあらわれてくると考えられることがらを選んで調査表を作つた。

その質問は次の 21 であつた。

生 活 調 査 表

1. あなたの村の漁業協同組合長さんは誰ですか。
2. 熊石村の村会議員は何人ですか。
3. 桧山支庁方面から選出された衆議院議員は誰ですか。
4. 桧山支庁方面から選出された参議院議員は誰ですか。
5. 今年のいかは豊漁ですか。
6. 今年のいかの値段はどの位しますか。
7. 獲れたいかはどの方面へ出荷されるのですか。
8. この辺の海の潮はどの方角からどの方角へ流れていますか。
9. この村は明治何年頃にひらけたのですか。
10. この辺で鯿のとれなくなつたのはいつ頃ですか。
11. 遊び時間や放課後に何をして遊びますか。
12. 遊び時間に誰とよく遊びますか。その友だちは誰ですか。
13. 学級の自治会で積極的に意見をいいますか。
14. 小、中学校を通じて今までに、学級委員をしたことがありますか。
15. 一ばん興味のある学科は何ですか。
16. 勉強がわからないとき先生のほかに誰か教えてくれる人がいますか。
17. 勉強がむずかしくとも自分だけでやつてゆけると思いますか。
18. いまの暮らしについて何か困ることが、ありますか。
19. その困ることは何ですか。
20. その困ることは何故困るのですか。
21. それを改めるにはどうしたらよいのですか。

以上 21 の質問は、学童の生活のなかに入つてくると考えられることがらや人間関係をあげたもので、交通の便のわるい、閉鎖的な漁村社会の政治、村の生産、学校生活、家庭生活に關している。

生活構造を調べるための調査表のほかに、パーソナリティをみようとしてもう一つの調査を行つた。それは、ローゼンツワイク法を参照として、次のような 9 つの場面を繪にあらわして、それに対する反応を答えさせたものである。場面の設定は学童の行動、習慣、態度が把えられるようにした。

1. 食卓を囲んでいる父と子を描いて、父が子供に「お前の一番好きな食物は何だい？」と訊いている場面。

2. 浜辺の船のそばで、父らしき人に「お前も船に乗って手伝ってくれるのかね？」と訊かれる場面。
3. 店で、買物に出かけた子供が店の人に「何を差上げますか？」と訊かれている場面。
4. 向うの方で子供が二人けんかをしている状態を描いておいて、こちらの二人の子供のうち一人が「君けんかだよ、どうしよう？」と訊いている場面。
5. 汽車が駅に停車している図を描き、父らしい人に「行ってくるよ、お前は どうする？」と訊かれる場面。
6. 子供が二人いて、背景に机を描き「君、宿題をやつてきたかい？」と訊かれる場面。
7. 校門を出る二人の友だちを描き、その一人が「君、これからどうするの？」と訊いている場面。
8. 本を読んでいる子供がそのそばにいる一人の子供に「その本をみせておくれよ」と訊かれている場面。
9. 雨降の状景を描き、家の中にいる二人の子供の一人に「こんな雨降りの日は家の中で何を するの？」と訊かれている場面。

以上の9つの場面におかれている学童の反応を、自分がその場合どう答えるかという風にさせて、答を求めたのであるが、この結果については、なお再検討を要するものがあるので、今後の報告では省略することとした。

以上の、調査のための諸資料を整理して、研究を進めたが、調査を実施するために、現地に赴いたのは、昭和28年7月23日から7月27日迄5日間であつた。なお本調査実施のためにそれ以前に一度現地に赴いて予備的準備をしておいた。この時期は、小、中学校とも学期末、加えていかの盛漁期で何かと多忙であつたのにも拘らず、先生方は、熱心に調査に協力して下さいました。子供たちも、見なれぬ私が、教室にいつて調査を行つている時も、大へん素直であつて、作業が終つてほつとしている私に向つて「たまにきたんだから、話でもいつばつやつてけれや」と大きな声で、せがむこともあり、のどかな、人なつこい子らであつた。

三 調査結果の整理の方法

調査表にあらわれた結果によつて、その整理する場合に、中心になるのは、問に対する答えをどう扱うかということである。ところがこの答えが、実際には次の四つとなつた。例えば、漁業協同組合長さんは誰ですか？に対して、(a) 答えぬもの (b) 答えたものの二つがあり、(b) は更に (c) わからないと答える消極的な答えと (b) 誰かの名前を挙げる積極的な答えに分れた。そして (b) の答えは正しく答えたものと、誤つて答えたものゝ二つになつた。

ところで、この調査で明らかにしようとしたのは生活構造の拡がりであるから、答えが正しく答えられなくともよいのである。又わからないという答えも、生活の中に、そうしたことが入りこんでいるからであると考えられた。そこで、答を整理する場合には、全く何も答えぬものとわからないという答え、及び正しくない答え、正しい答えをひつくるめたものの二つに分けて、前者を生活構造の拡がりのないもの、後者を生活構造の拡がりのあるものとして整理したのである。

このような取扱いをするに当つて次のような仮定が入っている。即ち、

学童にはそれぞれ生活の場があつて、そこには、彼らが直接に触れる事物があり、両親、兄弟姉妹がおり、友人、先生、近隣の人がある。学童は日常の生活に於て、それらの事物、人々と交渉をもち、関心を向けている。そして、学童はそれらとの交渉を通じて成長してゆくにつれて、間接に知ることができる事物や、人々に向つて関心をもつようになり、その生活範囲も拡がつてゆくと考えられる。このことは、学童の環境の拡大であり又生活構造の拡大ともいいうるものである。

このように考えると、わからぬという答えと、何にも答えていないものを区別することが当然であつて、わからないと答えたのは、彼の生活構造のなかにそれが入りこんでいるからである。

さて、答えをそのように生活構造をみるという立場からみてゆくとしても、生活要因が身近なものから間接的なものへと拡がつており従つて、調査表にあげた21の問も、この拡がりをもつてみることができるよう組み立てたので、答えの全体と型によつて、学童個々についての生活構造を拡がりとして把えることができる。

例えば調査表の質問1. 2. 3. 4. についてこれを見ると、1. は漁業協同組合長の名前、2. は村会議員の人数、3. は衆議院議員の名前、4. は参議院議員の名前を訊いているのであつて1から4までは単に並列的に問われているのではない。21の質問を、問の内容によつて類別し、更にそれを、拡がり近くから遠くに及ぶように、拡がりの拡大を示すウェイトをつけて配列し、その全体をもつて、生活構造の拡がりをあらわすものと考え、そこに生活構造図というものが考えられる。

生活構造調査カード

参議院議員の名前	衆議院議員の名前	村会議員の人数	漁協組合長の名前	い か の 出 荷	い か の 値 段	今 年 の い か 漁	困ること をどうす るか	困る理由	困ること	暮して困 ることの 有無
							く自信	勉強をしてゆ	学科を教える	興味のある
							学級委員 の経験	自治会で の意見	遊び相手	放課後の 遊び
				鯨のとれなく なつた時期	村の開基	この辺の海の 潮の流れ				

みると、次のように答えている。

1. 漁協組合長さんの名前？
2. 村会議員の人数？
3. 衆議院議員の名前？
4. 参議院議員の名前？
5. 今年のいかの漁は？
6. 今年のいかの値段？

そこで、次のような形をした生活構造の拡がりをみるためのカードを作つて、学童の記入した調査表を、答えによつて整理したのである。

このカードに、21の答えを記入していつたのであるが、カードの記入に当つては、前にのべたように、何も答えない空白のものはカードのなかのハコをそのままにしておき、わからぬという答えを含めて、兎もかく記入のあつたものは、カードの中のハコをぬりつぶした。

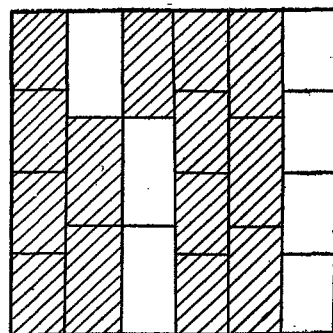
例えば、小学6年の生徒Aの調査表を

田村さん。
7人くらい。
かわむらぜんばちろ。
わからない。
大漁です。
わからない。

- | | |
|-------------------|------------|
| 7. いかの出荷先は？ | 一ナシー |
| 8. この辺の海の潮の方角は？ | 一ナシー |
| 9. この辺の村の開基？ | 一ナシー |
| 10. この鯨がとれなくなつた頃？ | 17年前。 |
| 11. 放課後の遊び？ | すもうやつてあそぶ。 |
| 12. 遊ぶときの遊び友だち？ | なりたせつお。 |
| 13. 自治会での意見？ | いいません。 |
| 14. 学級委員？ | ない。 |
| 15. 一番興味のある学科？ | さんす。 |
| 16. 勉強を教えてくれる人？ | おともだつからきく。 |
| 17. 勉強を自分でやれるか？ | やれない。 |
| 18. 暮して困ることがあるか？ | 一ナシー |
| 19. 困ること？ | 一ナシー |
| 20. 困る理由？ | 一ナシー |
| 21. 困ることをどう改めるか？ | 一ナシー |

この調調表をカードに示すと次の図となつて示される。

このようにして187枚の調査表を、カードのハコを埋めながら記入を行つてゆくと、ここに187枚のカードができた。空白のところの多いカード、殆どぬりつぶされたカード、下の方がぬりつぶされているが、上の方に空白が多いカードといったように様々に異なつた「型」として示された。これを生活構造が拡がりの型として扱えたのであるが、その型の分類をする前に、21の問のそれぞれが生活構造の拡がりを示すものとして、それが、学童の生活とどれくらい結びついているかを問題別に



みることにする。唯この場合、問の(18)「今の暮して困ることがありますか」について「ありません」と答えたものは、当然その次の「その困ることは何ですか」には答えないのであるから、応答の程度をみるのは18までの問について行うこととする。

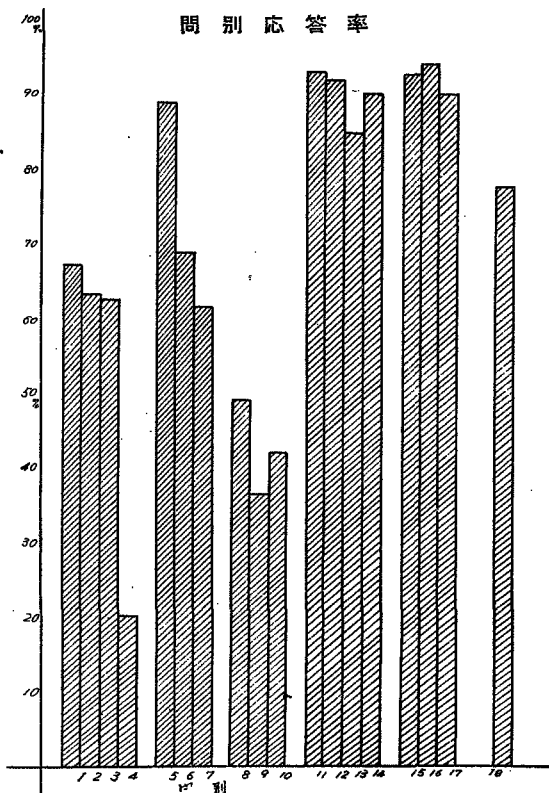
四 調査の一般的集計結果

187名が18の問に対して、生活構造の測定の立場から答えた人数は次の通りである。

- | | | |
|-----------------|------|-----|
| 1. 漁業協同組合長の名前 | 125人 | 67% |
| 2. 村会議員の人数を答えた者 | 117人 | 63% |
| 3. 衆議院議員の名を答えた者 | 116人 | 63% |
| 4. 参議院議員の名を答えた者 | 37人 | 20% |
| 5. いかの漁に答えた者 | 166人 | 89% |
| 6. いかの値段を答えた者 | 130人 | 69% |

7. いかの出荷先を答えた者	115人	62%
8. 海の潮の方角を答えた者	91人	49%
9. 村の開基に答えた者	70人	37%
10. 鯨の不漁の時期に答えた者	79人	42%
11. 遊びの種類を答えた者	173人	93%
12. 遊び友だちに答えた者	172人	92%
13. 自治会での意見を答えた者	160人	85%
14. 学級委員の経験を答えた者	168人	90%
15. 興味のある学科に答えた者	173人	93%
16. 勉強を手伝う人に答えた者	176人	94%
17. 勉強をやつてゆく自信を答えた者	169人	90%
18. 家の暮しの困ることに答えた者	146人	78%

この問別応答人数、応答率をグラフで示すと次表のようになる。



このグラフで明らかになったことは、18のそれぞれの問の間に、応答の差があることで半分以上応答のあつたのが14、半以下が4つである。学童の生活領域の中に、入っていない割合が比較的多くあらわれているのは次の事柄である。学童が他に比して、無関心な事柄は、

1. この辺の潮の流れの方角。
2. この辺で鯨のとれなくなつた時期。
3. この辺の村が開けた頃。
4. この方面選出の参議院議員。

の四つであつて、(1)は49%、(2)は42%、(3)は37%、(4)は20%が答えたにすぎない。この四つは時間的には過去の事実であり、又、経験としては、間接であるということもあろうが、兎もかくそれ程深く生活の中に入りこんでいないので、応答が低いのであろう。これに反して、学校生活のことは、殆んど90%以上の応答があつて、学童にとって学校生活

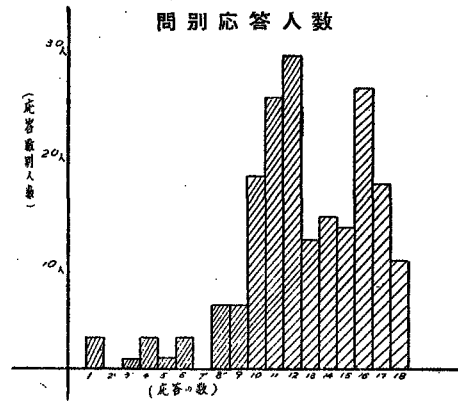
が、どんなに深くそれぞれの生活の中に入りこんでいるかわかる。

この18の問に対して、学童がどれだけ応答したかを、問の質的な差を無視して調べてみると、全く応答のないものはなく、1つしか答えないものから全部答えたものの間に、次のようになつて分布した。多く答えたものゝ順にこれを示すと、

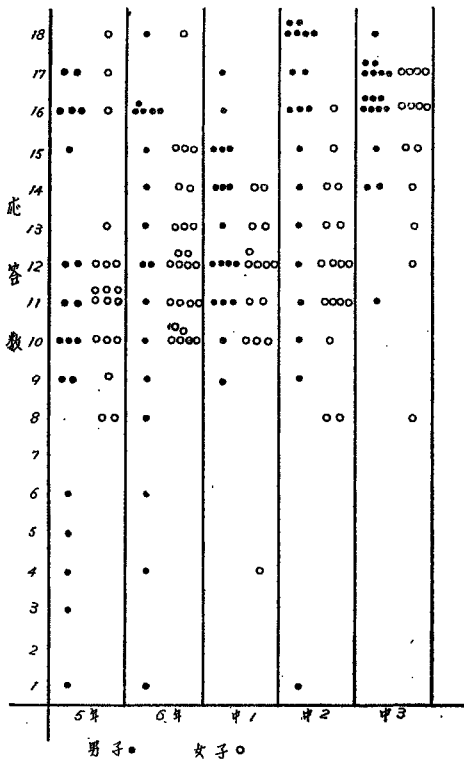
全部 (18) 答えたもの	10人	16 答えたもの	17人
15 / /	26人	14 / /	13人
13 / /	14人	12 / /	12人
11 / /	29人	10 / /	25人
9 / /	18人	8 / /	6人
6 / /	6人	5 / /	3人
4 / /	1人	3 / /	1人
1 / /	3人	計	187人

これをグラフで示すと右図の如くであつて、10以上応答のあつた者が165人あり、一応、これによつて、この18の事柄が大多数の学童の生活の中に入っているとみることができよう。

この場合、応答が多いということは、生活の中にとり入れられる事柄が多いことを示すが、さきに全体について調べた応答数の多少を、学年別、男女別に分けて、図示すると、下図のようである。



応答数と学年、男女の関係



生活の中に入っていることがらを、18の間に對する応答数でみた場合が前掲のグラフであるが、このグラフで看取されることが二つある。

1. 学年が上になるにつれて、応答数がだんだん多くなること。即ち応答数が全体の半分以下のものを、学年別にみると

小学5年	11人
小学6年	5人
中学1年	2人
中学2年	4人
中学3年	1人

となつている。

2. 男女別に応答数をみると下級の場合、女子は男子よりも一般に応答数が多いが、上級になるにつれて——中学一年を境として——逆に少なくなる傾向があること。応答数の半分以下のものを学年別にして男女がどのように分布されるかをみると次のようになつて、一つの傾向がみられる。

学年	男子	女子
小学5年	5	3
小学6年	5	0
中学1年	1	1
中学2年	2	2
中学3年	0	1

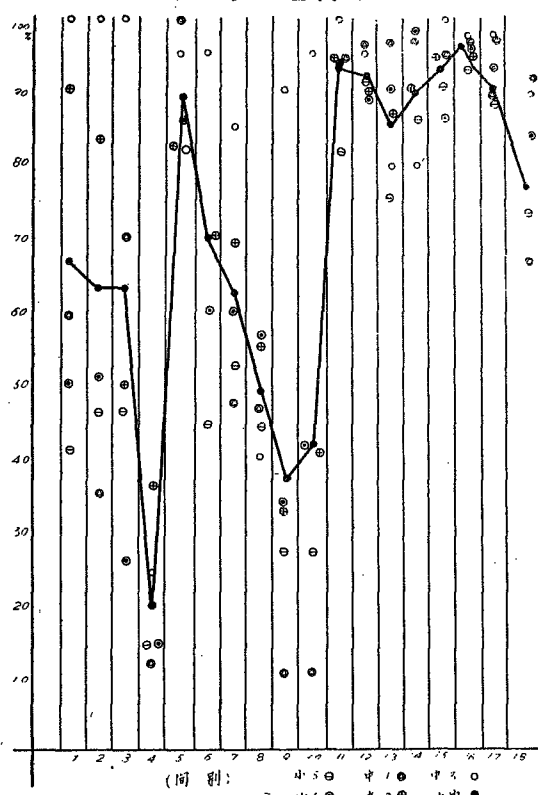
この関係を、応答数の多いものについて調べてみても同じ傾向が見出される。即ち15以上答えたものの数を学年別、男女別に示すと

学年	男子	女子
小学5年	5	3
小学6年	7	4
中学1年	5	0
中学2年	12	2
中学3年	16	12

となる。小学校5、6年のときは、それ程、男女の差は著しくないが、中学1、2年になると、女子は著しく少なくなり、中学3年になつて、漸く男子に追付こうとしている。

終りに、各問に対する応答率を図示すれば右上掲図の通りであるが、中学2、3年は平均より上廻り、中学1年、小学5、6年は平均より下廻っていることがわかる。

問別、学年応答率グラフ



五 生活構造の拡がりの類型

(1) 類型について

前節では、生活構造をみるための質問に関して、学童がそれぞれ、どれだけ多く答えたかという量的な観察と、個々の質問に対する応答の割合をみることによつて、その質問が生活構造の差をみるのに、適当かどうかを調べると共に、学年、男女の別によつて、応答数がどのようになるかを調べた。その結果、応答の割合が極端に高く全体として同じようになつて、差がみられぬとか逆に極端に低くて同様に差が掴みにくいという風にならないことがわかつた。

ところで、生活構造の拡がりは、狭いものと、広いものとに、色々に差のあるものとして考えられるのである。この点に関して、問は拡がりの差がみられるように配列したのであるから、応答数の多小のみによつて、拡がりをきめることはできない。そこで正しくこの拡がりをみるためには、これらの問の全体の応答を、類型的に把えねばならぬだろう。

そこで、生活構造の拡がりを拡がりの型として、把える方法として、次のような整理をした。

さきに、生活構造の拡がりをみるために作成したカードとその記入の仕方を示したが、その結果

出来上つた 187 枚のカードを「型」によつて類型的に分類していつた。

(1) 先づ 187 枚のカードについて、型の同じものを集めながら分類してゆくと、二枚以上全く同じ型をしているものが、16 型あつた。一方、ほかに同じ型をしたものがなく、それぞれに型がちがつているのが 111 型あつた。そこで、127 の型が得られた。このうち、二枚以上同じ型のものの枚数は次の通りである。

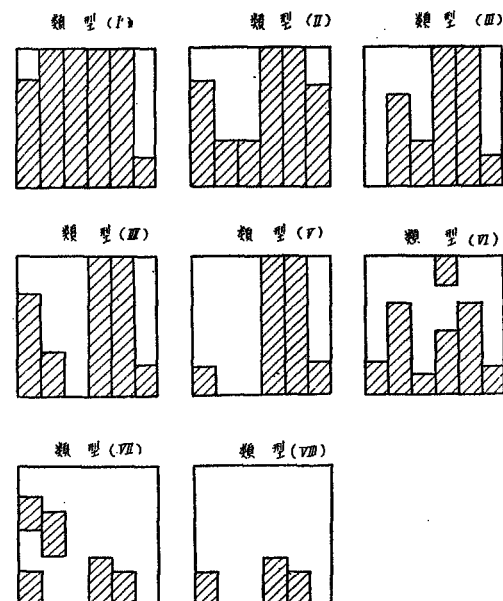
同じ型が 13 枚あるもの	1	同じ型が 4 枚あるもの	1
〃 12 〃	1	〃 3	4
〃 9 〃	1	〃 2	5
〃 6 〃	1	型がそれぞれ異なるもの	111
〃 5 〃	2	計	127 型

このように 127 型が得られたが、これでは、生活構造の拡がりが 127 の差のあるものとして把えることができても、それ以上にそれが何を示しているかを明らかにすることができない。それでこの 127 の型について、生活構造図のハコの位置を中心に、その横と縦の多少の差を、捨象して、類型化をすゝめてゆくと、65 の型が得られた。

この 65 の型について、拡がりがハコの全体に拡がつているような型と、拡がりの殆んどない型は最も明瞭に類別されるから、この 2 つを除いた 63 の型について、

1. 横の拡がりがどのようなものであるか
2. 縦の拡がりがどのようなものであるか
3. 特定のハコが空白になっているか
4. 特定のハコだけが埋められているか

という点に注意して、類型化をすゝめてゆくと 63 の型は 6 つの型として類別された。こ



生活構造カード

議員	参議院	議	衆議院	議員の数の	長の名	漁協組合	いかの出荷先	いかの値段	いかの漁	漁について	村の開基	潮の方角	学校委員	自治会	友だち遊び	勉強の自信	助ける人	興味ある学科	くらしの
----	-----	---	-----	-------	-----	------	--------	-------	------	-------	------	------	------	-----	-------	-------	------	--------	------

の 6 つの型と、さきに得られた極端に拡がりの狭い型と極端に狭い型との 2 つを合わせて 8 つの類型が得られた。この 8 つの類型を、共通にあらわれる標識によつて、類型として示せば、次の通りである。なお説明のために生活構造カードを示す。

この 8 つの類型に 187 人の生徒が分けられたが各類型別にその人数をみると、

類型 (I)	59人
〃 (II)	34人
〃 (III)	18人
〃 (IV)	17人
〃 (V)	28人
〃 (VI)	16人
〃 (VII)	8人
〃 (VIII)	7人

となつた。

又これを男女別にみると下の通りである。

	男子	女子	計
類型 (I)	42人	17人	59人
〃 (II)	15人	19人	34人
〃 (III)	4人	14人	18人
〃 (IV)	3人	11人	17人
〃 (V)	11人	17人	28人
〃 (VI)	7人	9人	16人
〃 (VII)	4人	4人	8人
〃 (VIII)	5人	2人	7人
計	94人	93人	187人

学年別の類型別人数は右上表の通りである。

以上の各類型の男女別、学年別人数の分布をグラフで下に示すと右図のようになつて、そこに或る傾向があらわれているのがわかる。

これらの数字、図表の示すところを説明する。

生活構造の拡がりが、8つの類型に分類されたが、この8つの類型は夫々拡がりの広狭を表

わしているものであり、その各々は、それぞれ他と区別される共通の拡がりをもっていることに着目して、8つの類型を問と関係させて、説明する。

類型Ⅰは、拡がりが全体にわたっている型で、生活構造の拡がりが広い。

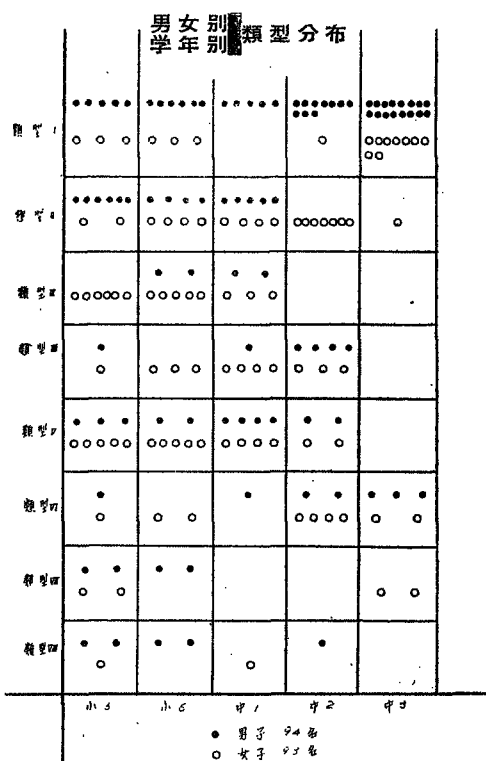
類型Ⅱは、横の拡がりはあるが、縦の拡がりが、横に比して浅く、従つて身近なことがらに比して間接的なことがらが生活の中に入っていない。

類型Ⅲは、生活構造は拡がりをもっているが、特定のことがらが、全く生活の中に入っていない型で、この型では、政治や土地の支配者層について殆ど関心をもたない。

類型Ⅳは、類型Ⅲと似ているが、村の生産やそのほか、村のことについて、余り関心がない。

学年別類型人数

類型	学 年	5 年	6 年	中 1	中 2	中 3	計
類 型 Ⅰ		8	9	5	11	26	59
〃 Ⅱ		8	9	9	7	1	34
〃 Ⅲ		6	7	5	0	0	18
〃 Ⅳ		2	3	5	7	0	17
〃 Ⅴ		8	8	8	4	0	28
〃 Ⅵ		2	2	1	6	5	16
〃 Ⅶ		4	2	0	0	2	8
〃 Ⅷ		3	2	1	1	0	7
計		41	42	34	36	34	187



類型Ⅴは、学校生活に関することがらについては、他の型（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ）と同じように、生活構造の拡がりはあるが、それ以外のいわば社会的ことがらは生活の中に入ってきていない。

類型Ⅶは、学校生活以外のことがらが生活の中に入っている度合に比して、学校生活に対する関心が低い。

類型Ⅷは、生活構造の拡がり、これまでにあげた6つの型に比して狭く、且つその広がりが、バラバラで不規則である。

類型Ⅷは、生活構造の拡がり、殆どないくらいに、極端に狭い型であつて、生活構造図が、空白に近いものとして示されている。

結局、拡がりの最も狭い類型Ⅷと、最も広い類型Ⅰとの間に、それぞれ拡がりに差のある6つの類型が存在することになる。

(2) 学年別類型分布

学年別に、各類型への分布は前表で示したが、そこでは学年によつて、差のあることが認められる。即ち8類型を拡がりの広狭によつて

(A) 拡がりの広い(Ⅰ)(Ⅱ)型

(B) 拡がりの狭い(Ⅴ)(Ⅶ)(Ⅷ)型

(C) 拡がり、或る事柄に関して殆どないが全体としては(B)より広く、(A)より狭い(Ⅲ)(Ⅳ)(Ⅵ)型

の三つに分けて、分布の割合をみると、

	A (Ⅰ, Ⅱ)	B (Ⅴ, Ⅶ, Ⅷ)	C (Ⅲ, Ⅳ, Ⅵ)
5年	38%	36%	26%
6年	43%	28%	29%
中1	41%	26%	33%
中2	50%	14%	36%
中3	80%	6%	14%

となる。

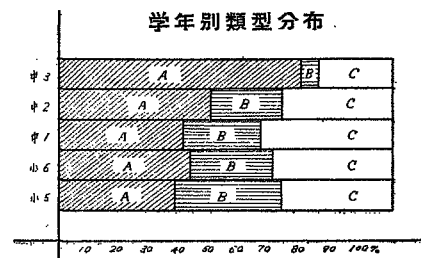
この分布割合は、学年が上になるにつれて、生活構造の拡がりの広い(A)が多くなると共に、その狭い(B)が減少していることを示している。

このことは、生活構造の拡がり、が学童の年齢的成長と発達にも関係があることを示しているのである。

又拡がりの拡大も漸次に、一様に進むのではなく、中学2年生になると急激に、拡大していることが注目される。

(C)については、中学三年を除いては、各学年にそれ程顕著な特徴はみられない。

最後に、生活構造の広狭について、(A)(B)(C)の分布を、学年別に示すと上図のように



なる。

(3) 男女別類型分布

男女別の各類型への分布は、さきに数字で示したがこの関係をみるためにグラフで示すと次図のようになる。

このグラフで、男女の差が、はつきり表れているのは、(I)(II)(VII)型ではかの5つの型は大体分布が平均しているとみてよい。

(I)型は、拡がりの広い生活構造をもつている型であるが、男子は81%を占めるのに対し女子は29%にすぎない。

(II)の型は、或る部分の拡がりを欠く型であつて、村の政治や支配者層などについての関心のない型であるが、これは(I)とは逆に、女子が圧倒的に多くこの中に入りこんでいる。

(VII)の型は、最も生活の拡がりの狭い型であるが、この型に属する者、7人のうち5人までが男子である。

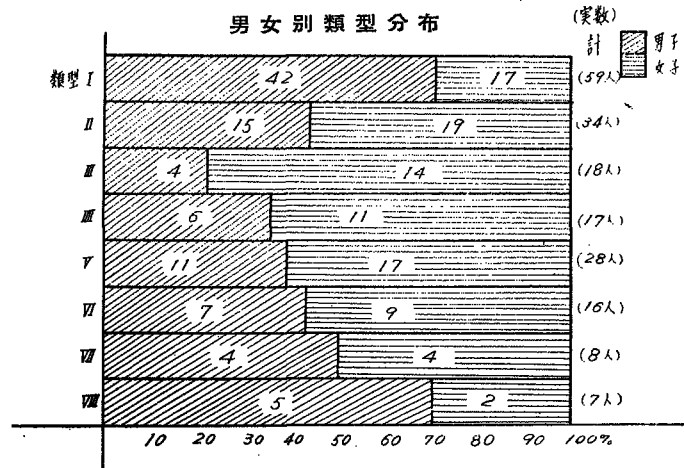
これらのことを総合すると、男子については、一般に拡がりの広い型に女子より多く入る傾向があるが、極めて少数の無関心型には、男子の方が女子より多くなる傾向がある。

又女子は、一般に拡がりが男子よりも狭いこと、政治のことについて、殆んど関心をもつていないことが指摘される。殊に後の点は、こうした漁村のみならず、婦人全体の政治的自覚の欠如がいわれていることと、考え合せると、女子は既に、学童に於てすら、そうしたことに無関心であるから後になつて益々、政治的に関心をもたなくなるのうなづけるのではなかろうか。

(4) 類型と応答率

これまでの、生活構造の拡がりの差を、学年別、男女別に類型を中心に調べたのであるが、18の間に対して、各学年の学童が分けられた8つの型に属するものが、どれだけ答えたかを表にまとめたので次に掲げる。

1. 小学5年類型別応答表
2. 小学6年 〃
3. 中学1年 〃
4. 中学2年 〃
5. 中学3年 〃



(1) 小 学 5 年

問別 類型	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
I 型(8人)	7	7	6	4	8	8	8	8	7	7	8	8	8	8	8	8	8	7
II 型(8人)	2	3	6	2	3	1	4	5	1	3	8	7	5	8	8	8	8	6
III 型(6人)	0	0	1	0	5	6	6	3	1	0	6	6	5	6	6	5	6	4
IV 型(2人)	1	1	2	0	2	1	2	0	0	0	2	2	2	2	1	2	2	2
V 型(8人)	4	3	1	0	5	0	0	1	0	1	8	8	7	7	8	8	8	7
VI 型(2人)	2	2	1	0	1	0	0	1	1	0	2	2	2	1	1	2	2	1
VII 型(4人)	1	3	2	0	3	1	1	0	1	0	0	4	1	1	3	3	2	2
VIII 型(3人)	0	0	0	0	2	1	1	0	0	0	0	0	1	1	2	0	0	0
計	17	19	19	6	34	18	22	18	11	11	34	37	31	34	37	36	36	29

(2) 小 学 6 年

問別 類型	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
I 型(9人)	7	9	4	4	9	8	7	9	8	9	9	9	9	9	9	9	9	8
II 型(9人)	6	9	5	0	8	6	6	7	2	4	9	9	9	9	8	8	8	8
III 型(7人)	0	0	0	0	6	4	3	6	2	3	7	7	6	7	6	7	6	7
IV 型(3人)	3	2	2	0	3	3	2	0	0	0	3	3	3	3	3	3	3	3
V 型(8人)	3	1	0	0	6	2	4	1	1	0	8	8	8	8	8	8	8	8
VI 型(2人)	1	0	0	0	2	2	2	1	1	0	2	2	2	2	0	0	0	1
VII 型(2人)	1	1	0	1	1	0	1	0	0	0	1	0	1	2	2	2	1	0
VIII 型(2人)	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0
計	21	22	11	6	36	25	25	24	14	17	39	37	38	41	36	40	35	35

(3) 中 学 1 年

問別 類型	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
I 型(5人)	4	3	5	9	5	5	5	5	1	2	5	5	5	5	5	5	5	5
II 型(9人)	4	5	7	1	9	6	5	8	1	1	9	9	9	9	9	9	9	9
III 型(5人)	0	0	3	0	5	5	3	2	0	0	5	5	5	5	5	5	5	5
IV 型(5人)	5	4	4	0	5	5	2	0	0	0	4	5	5	5	5	5	5	5
V 型(8人)	7	0	5	0	8	1	1	0	0	0	8	8	8	8	8	8	8	6
VI 型(1人)	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	1	1	1	1	0	1	1	1
VII 型(0人)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
VIII 型(1人)	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	20	12	24	4	34	22	16	16	2	3	32	33	33	33	32	33	33	31

(4) 中 学 2 年

問別 類型	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
I 型(1人)	11	11	10	9	11	11	11	10	11	11	11	11	10	11	11	11	11	8
II 型(7人)	7	4	0	0	6	7	5	5	0	2	7	7	7	7	7	7	7	4
III 型(0人)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
IV 型(7人)	7	7	5	3	6	7	6	1	0	0	7	7	6	6	7	7	7	4
V 型(4人)	3	2	1	0	0	1	0	0	0	1	4	4	4	4	4	4	4	2
VI 型(6人)	5	5	1	1	6	6	1	3	1	1	5	3	4	5	5	5	3	5
VII 型(0人)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
VIII 型(1人)	0	1	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	33	30	18	13	30	33	23	19	12	15	34	32	31	33	34	34	32	23

(5) 中 学 3 年

問別 類型	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
I 型(26人)	26	26	26	5	26	26	26	13	26	26	26	26	25	25	26	26	26	21
II 型(1人)	1	1	1	0	1	1	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
III 型(0人)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
IV 型(0人)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
V 型(0人)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
VI 型(5人)	5	5	5	3	5	4	3	1	4	5	5	3	1	0	5	5	4	5
VII 型(2人)	2	2	2	0	0	1	0	0	1	1	2	2	0	1	2	1	2	1
VIII 型(0人)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
計	34	34	34	8	32	32	29	14	31	33	34	32	27	27	34	33	33	28

(4) 職 業 と 類 型

生活構造の拡がりが、学年、男女によつて、差が認められることを例証したが、このことは、生活主体たる人間の側にその原因を求めねばならぬであろう。しかし生活構造は、主体と環境要因との組合せによつて形成されるのであるから、単に学年、男女の差だけに、生活構造の拡がりを関係づけただけでは不十分である。

学童の生活は、家庭での生活と深く重なり合つており、家庭の生活構造は又世帯主の職業によつて規定されることは生活時間調査その他によつて明らかにされている。そこでこの8つの類型について、職業とどのような関係があるかをみることにする。187人の学童の家庭の職業を調べたら次の19であるが、矢張り漁家が最も多く全体の63%を占めている。

漁業	117	俸給生活者	18	商業	14
船大工	10	無職	9	運送業	3
農業	2	建具職	2	建築業	1
桶屋	1	板金工	1	医師	1
林業	1	日雇	1	車馬迫	1
旅館業	1	理容業	1	製造工業	1
洋裁	1			計	187

これらの職業が、8つの型にどのように分布しているかを、みると次表の通りである。

職 業 別 類 型 分 布

職業	I 型	II 型	III 型	IV 型	V 型	VI 型	VII 型	VIII 型
漁業(117人)	37	19	15	11	15	10	8	2
俸給者(18人)	5	5	1	2	5	0	0	0
商業(14人)	6	2	1	3	0	2	0	0
船大工(10人)	1	3	0	1	2	2	0	1
無職(9人)	2	1	0	0	2	0	0	4
運送業(3人)	1	1	0	0	1	0	0	0
農業(2人)	0	0	0	0	1	1	0	0
日雇(2人)	1	0	0	0	1	0	0	0
建具職(2人)	1	1	0	0	0	0	0	0
建築業(1人)						1		
旅館業(1人)		1						
理容業(1人)		1						
製造工業(1人)			1					
医師(1人)	1							
桶屋(1人)	1							
馬車迫(1人)	1							
板金工(1人)					1			
林業(1人)	1							
仕立業(1人)	1							
計(187人)	59	34	18	17	28	16	8	7

これらの職業のうち、例数の多い、漁業、俸給生活者、商業、船大工、無職の学童の各類型への

分布を調べよう。

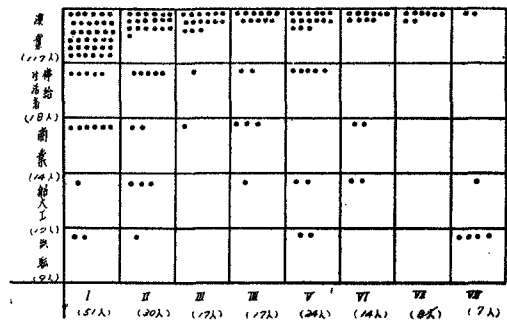
1. 漁家の子供は、各類型に分散しているが、比較的多く分布しているのは、Ⅲ、Ⅶ、Ⅷの型である。就中Ⅶの型に入るのは8人共漁家の子供である。
2. 俸給生活者の子供は、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷの型には全くみられず、Ⅱ、Ⅴの型に比較的多い。
3. 商家の子供は、Ⅴ、Ⅶ、Ⅷになく、Ⅲの型がかなり多くあらわれている。
4. 船大工の子供は、各類型に平均にあらわれている。
5. 無職の子供は、ⅤとⅧに、その分布が偏っている。

これらの例証によつて、職業と類型との相関を、内容から把握すると、漁業、船大工、無職の子供は、拡がりの狭いⅦ、Ⅷに属する15人の全部を占めている。

(Ⅲ)は政治的なことがらに関心のない型であるが、この型には漁家の子供が多い。

俸給生活者、商家の子供は比較的に拡がりの広いⅠ、Ⅱの型に多い。このことは又拡がりの狭いⅦ、Ⅷ型や、政治的関心のうすいⅢ型には全くないか、又はほとんどない結果となつてあらわれている。これらの関係は度数分布で示すと右表のようになって表われる。

職業別類型分布グラフ



更に、学年別に職業別の類型分布を示すと次のグラフと表になる。

小 5、職 業 別 類 型

職業 類型	漁業	俸給者	商業	大工	無職	運送	建築	板金工	旅館	理容	製造	計
(Ⅰ)	4	1	1	1	-	1	-	-	-	-	-	8
(Ⅱ)	3	2	-	1	-	-	-	-	1	1	-	8
(Ⅲ)	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	6
(Ⅳ)	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
(Ⅴ)	5	1	-	-	1	-	-	1	-	-	-	8
(Ⅵ)	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	2
(Ⅶ)	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4
(Ⅷ)	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	3
計	23	5	1	2	4	1	1	1	1	1	1	41

小 6、職 業 別 類 型

職業 類型	漁業	俸給者	商業	大工	農業	無職	運送	医師	林業	計
(Ⅰ)	5	1	-	-	-	1	-	1	1	11
(Ⅱ)	6	1	-	-	-	1	1	-	-	9
(Ⅲ)	5	1	1	-	-	-	-	-	-	7
(Ⅳ)	3	-	-	-	-	-	-	-	-	3
(Ⅴ)	3	2	-	1	1	-	1	-	-	8
(Ⅵ)	1	-	-	-	1	-	-	-	-	2
(Ⅶ)	2	-	-	-	-	-	-	-	-	2
(Ⅷ)	1	-	-	1	-	-	-	-	-	2
計	26	5	1	2	2	2	2	1	1	42

中 学 1 年 生

職業 類型	漁 業	俸給者	商 業	大 工	無 職	建具業	洋 裁	日 雇	計
(I)	1	2	1	-	-	-	1	-	5
(II)	4	2	2	-	-	1	-	-	9
(III)	5	-	-	-	-	-	-	-	5
(IV)	4	-	1	-	-	-	-	-	5
(V)	3	2	-	1	1	-	-	1	8
(VI)	1	-	-	-	-	-	-	-	1
(VII)	-	-	-	-	-	-	-	-	0
(VIII)	1	-	-	-	-	-	-	-	1
計	19	6	4	1	1	1	1	1	34

職業別学年別類型分布 (B)

(漁業)	中3	●●●●●●●●				●●	●●	
	中2	●●●●●●●●	●●●●●●		●●●	●●●●	●●●●●●	
	中1	●	●●●●	●●●●●	●●●●	●●●	●	●
	小6	●●●●	●●●●●●	●●●●●	●●●	●●●	●●	●
	小5	●●●●	●●●	●●●●●	●	●●●●●	●	●●●●
		(I)	(II)	(III)	(IV)	(V)	(VI)	(VII)
(俸給生活者)	中3	●						
	中2			●				
	中1	●●	●●			●●		
	小6	●	●	●		●●		
	小5	●	●●		●	●		
		(I)	(II)	(III)	(IV)	(V)	(VI)	(VII)
(商業)	中3	●●					●●	
	中2	●●			●●			
	中1	●	●●	●		●		
	小6							
	小5	●						
		(I)	(II)	(III)	(IV)	(V)	(VI)	(VII)

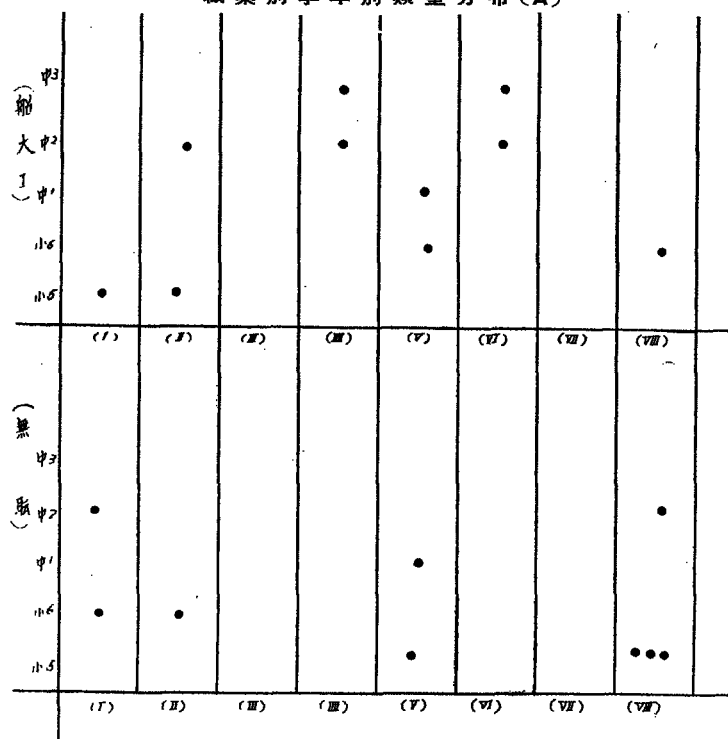
中 2, 職 業 別 類 型

職業 類型	漁	業	停	給	者	商	業	大	工	無	職	計
(I)		8		-			2		-		1	11
(II)		6		-			-		1		-	7
(III)		-		-			-		-		-	0
(IV)		3		1			2		1		-	7
(V)		4		-			-		-		-	4
(VI)		5		-			-		1		-	6
(VII)		-		-			-		-		-	0
(VIII)		-		-			-		-		1	1
計		26		1			4		3		2	36

中 学 年 3 生

職業 類型	漁業	俸給者	商業	大工	建具職	桶屋	日雇	馬車追	計
(I)	19	1	2	-	1	1	1	1	26
(II)	-	-	-	1	-	-	-	-	1
(III)	-	-	-	-	-	-	-	-	0
(IV)	-	-	-	-	-	-	-	-	0
(V)	-	-	-	-	-	-	-	-	0
(VI)	2	-	2	1	-	-	-	-	5
(VII)	2	-	-	-	-	-	-	-	2
(VIII)	-	-	-	-	-	-	-	-	0
計	23	1	4	2	1	1	1	1	34

職業別学年別類型分布(A)



上掲のグラフで、更に職業別学年別に、各類型の分布をみたが、その内容につき職業と学年の関係を調べると、(1)漁家の子供は、上学年にすすむにつれて(Ⅰ)の型が多くなっている。これは、家業の手伝いなどを通じて、視野が開け、社会的関心が深まることによるものと考えられる。

又(Ⅲ)の型は下学年に多いが、中学2、3年になると全くない。このことは、(Ⅰ)型が上級に進むにつれて多くなることと関係があると思われる。即ち学年が上になるにつれ、政治的関心が深まり、Ⅲの型が減るのであろう。

漁家の子供は、学年がすすむにつれ、Ⅵの型が多くなる傾向がある。これは、学校生活に対してそれ程深い関心をもたなくなるためであらうか。

(2) 俸給生活者の子供は、概して生活構造の広くない型に偏よつている。Ⅴの型に比較的が多いが、このようなへき地の漁村では、俸給生活者の家庭は、それ程の隔たりを漁家との間にも、もつていないからであらう。

(3) 商家の子供は、一般に拡がりの広い型に多い。商人の子供は、親の話を通じて、自然そうしたことに関心をもち、従つて生活の範囲も広がるのであろう。

(4) 大工の子供は、拡がりが広くない代りに、又狭い型にも入つていない。要するに色々な場面に身をおくが、深く広くその環境に入りこんでいないからであると思われる。

(5) 無職の子供は、半分以上がⅤ、Ⅵ、Ⅶの型に入っている。この子供たちは、多くは母子世帯の子であつて、何事にも消極的な関心しか示さぬのであろう。この9人の無職者の家の子供のうち5人までが、生活保護をうけている家の子供で、更にこのうちの4人はⅦの型である。

(5) 被保護児童と類型

この村で、生活保護家庭が約百戸あるが、調査対象となつた児童、生徒のうち12人が被保護児童である。これら12人の類型と、職業との関係を表示してみることにする。

被保護児童の職業別類型

		類型								計
職業		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	
		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	
無職	職	0	1	0	0	0	0	0	4	5
漁業	業	0	1	3	0	1	0	0	0	5
農業	業	0	0	0	0	1	0	0	0	1
日雇	雇	0	0	0	0	1	0	0	0	1
計		0	2	3	0	3	0	0	4	12

これでわかることは、生活保護家庭の子供はⅠ、Ⅱ、Ⅲの型にはあられせず、ⅤとⅦに多く表われる。即ち被保護児童の多く表れるのは

1. 最も拡がりの狭いⅦ型とⅤ型に多い。
2. 政治的関心のほとんどないⅢ型。
3. 身近な問題への拡がりは、かなり広いが、深さのないⅡ型に多い。

この事実から考えられることは、被保護児童の生活は、視野も狭い上に、環境も封鎖的になつていことから、どうしても、生活の拡がりは狭くなることが想像される。

(6) 漁家階層と類型

漁家の階層区分は、色々な方法でなされているが、ここでは、漁業協同組合の漁船所有状況調査によつて階層を三つに分けて、階層別類型をみた。117人の漁家の子供のうち照合ができたのは69人の学童についてであつて、階層別人数は次の通りである。

階層別類型分布

階層	類型	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	計
動力船漁家		10	3	3	3	0	1	1	0	21
無動力船漁家		9	5	8	3	5	1	2	2	35
無漁船漁家		2	2	1	2	4	1	1	0	13
計		21	10	12	8	9	3	4	2	69

にⅠ型に多く集まっており、拡がりはいと考
えられる。

2. 無動力船漁家は、特定の型への偏りを示していないが、この階層全体として、Ⅲ、Ⅴの型へ集まりが偏っている。これは、無動力船漁家の子供は、政治に無関心であると共に、比較的、生活構造の拡がりはい狭い方を多いことを示す。

3. 無漁船漁家は、全般的に、拡がりの狭い

階層別学年別類型

有動力船漁家		類型									計
学年		I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII		
小 5	5	1	1								2
小 6	6		2	2	1						5
中 1	1	2	1	1							4
中 2	2	2		1	1						4
中 3	3	5							1		6
計		10	3	3	3	0	1	1	0		21

無動力船漁家		類型									計
学年		I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII		
小 5	5	2		3	1				2		8
小 6	6	3	2	2	1			1			9
中 1	1		1	3		4				1	9
中 2	2	1	2		1	1				1	6
中 3	3	3									3
計		9	5	8	3	5	1	2	2		35

学年別階層別類型

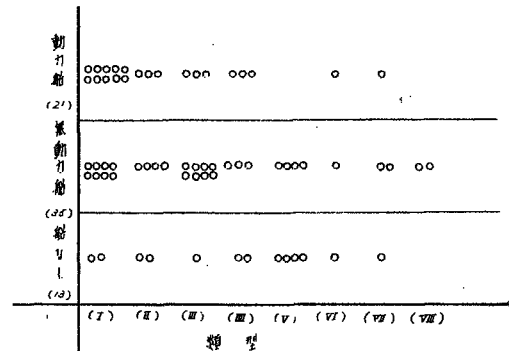
階層	類型	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	計
小 5	有動力船漁家	1	1							2
6	無動力船漁家	2		3	1			2		8
年	船なし漁家		1			1				2
計		3	2	3	1	1	0	2	0	12

1. 動力船漁家 21人
2. 無動力船漁家 35人
3. 無漁船漁家 13人

この69人が各階層別にどの類型に分布しているかを表示する。

このグラフで各階層の類型分布の傾向として、1. 動力船漁家は、相対的

階層別類型分布グラフ



船なし漁家

学年	類型	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	計
小 5	5		1			1				2
小 6	6			1						1
中 1	1				1	1				2
中 2	2		1		1	2		1		5
中 3	3	2					1			3
計		2	2	1	2	4	1	1	0	13

型に属する。このことは、Ⅰ型に極端に少なくなっていることと照合している。

この点につき、説明のため次に

1. 階層別、学年別類型
2. 学年別、階層別類型 の二つの表を掲げておく。

階層	類型	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	計
小 5	有動力船漁家		2	2	1					5
6	無動力船漁家	3	2	2	1		1			9
年	船なし漁家			1						1
計		3	4	5	2		1			15

階 層 \ 類 型		I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	計
中 1 年	有動力船漁家	2		1	1					4
	無動力船漁家		1	3		4			1	9
	船なし漁家				1	1				2
計		2	1	4	2	5			1	15
中 2 年	有動力船漁家	2			1		1			4
	無動力船漁家	1	2		1	1			1	6
	船なし家漁		1		1	2		1		5
計		3	3		3	3	1	1	1	15

階 層 \ 類 型		I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	計
中 3 年	有動力船漁家	5	0					1		6
	無動力船漁家	3								3
	船なし漁家	2					1			3
計		10	0	0	0	0	1	1	0	12
総 計		21	10	12	8	9	3	4	2	69

(7) 所得と類型

学童の家庭の所得と、類型との関係を見るために役場の台帳で、課税所得額を照合可能のものについて調べたら74人について、家庭の所得額がわかった。この所得額も家が労働の態様によつて異なるから職業別にあげる。

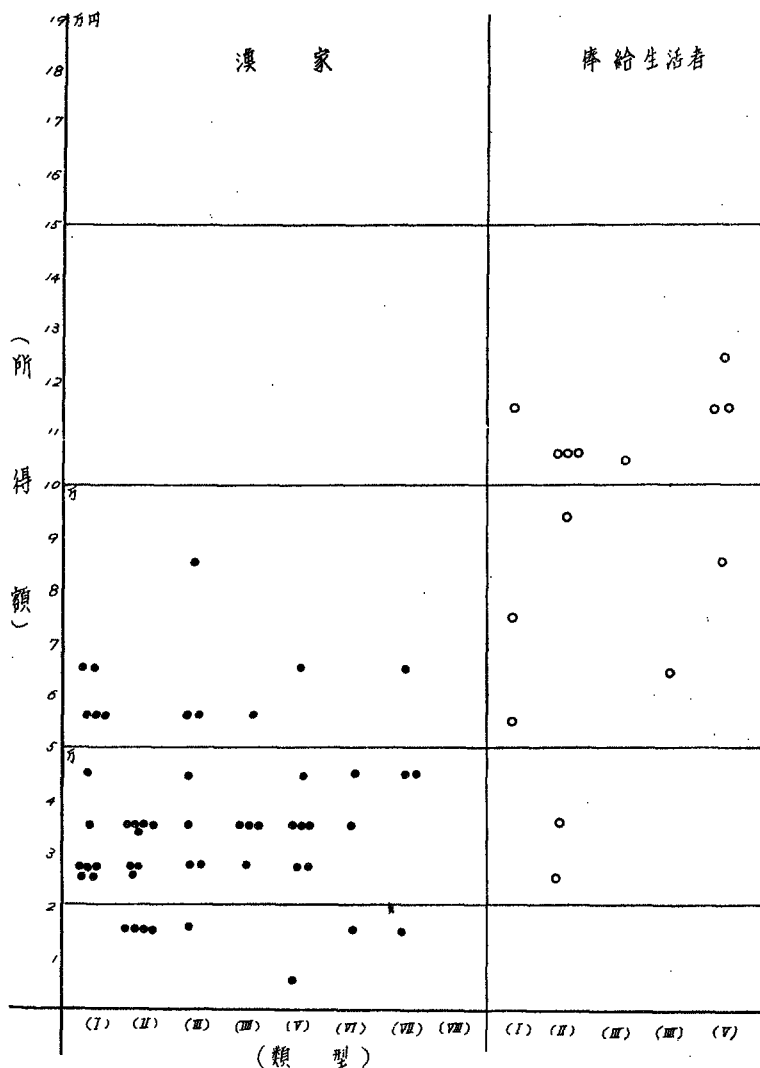
漁 業 52人
俸給生活者 16人
商 業 2人
大 工 2人
馬 車 追 1人
林 業 1人

計74人となつて、類型で分けると、次表の通りである。

この所得分布を、例数の多い漁業、俸給生活者についてグラフで示す。

これで見ると、漁家の子供の中で、I型のものの家の所得は、他の型の子供のそれよりも高い。このことは、漁業という同一の生産様式をもつ家の子供のうちで、生活が上の階層に属するものは

所得別類型分布



職業	類型	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	計
漁業		12	12	8	5	8	3	4	0	52
俸給生活者		3	6	1	1	5				16
商業		1			1					2
大工						2				2
馬車道		1								1
林業		1								1

生活の範囲も拡がっていることを示す。この点につき、階層と類型で考察された、動力船漁家階層がⅠ型へ集る傾向と考え合せると、漁家では動力船をもち、所得も高い家の子供は、ほかの子供に比して、生活が豊かで拡がりが広いということがいえよう。

俸給生活者の子供については、所得の高さが、拡がりに比例するという漁家にみられた傾向はみられず却つて、所得の高いものが、拡がりの狭い方に多い。このことは、俸給生活者の生活が、所得の高さとそれ程関係がなく、従つてこの土地では俸給生活者の生活が同じような様式で営まれていることを示すものと考えられる。

六 生活構造の内容

これまで、生活構造の拡がりを中心として、その広狭の差による類型と、男女、学年、職業、所得、階層の関係をみて、生活構造の差が、どのようにあらわれるかを調べた。

しかし、生活構造の拡がりの内容を調べなければ、拡がりがどんな分野で、広く、又は狭いのか明らかにならない。このことについて、特に注意したのは次の五つの間に対する答えであつた。

1. 学級の自治会で積極的に意見をいいますか。
2. 小・中学校を通じ、今までに学級委員をしたことがありますか。
3. 勉強がわからぬ時、先生のほかに誰か教えてくれる人がありますか。
4. 勉強が、むずかしくとも自分でやつてゆけると思いますか。
5. いまの暮らしについて何か困ることがありますか。

これらの5つの間に対してそれぞれ85%、89%、93%、89%、78%の応答率があつて、応答率は極めて高い。

ところが、この答えは、肯定的な答えと、否定的な答えの双方を答えとしたものである。そこで答えの仕方、人数をみて、その比率を下に示す。

1. {意見をいう	44人	2. {委員をした	57人
{意見をいわぬ	116人	{委員をせぬ	111人
3. {教える人がある	126人	4. {勉強をやれる	53人
{教える人がいない	50人	{勉強をやれぬ	116人
5. {暮らしに困る	52人		
{暮らしに困らぬ	94人		

次表では(A)、(B)についてⅠ型の占める割合が比較的多い。生活構造が広いことは学校生活でも積極的であると考えられる。又委員をしたことはあるが意見をいわないものはⅤの型に著しく、反対に意見はいうが委員になつたことがないものがⅢの型に多い。

(C)(D)について教えてくれる人はⅥを除いて大体ある。しかし、自分で勉強がやつてゆけると答えた比率は一般に低い。

(E) 困ることがあると答えたものは、ⅢとⅣの型に多い。困ることがあると答えた者は52人で

内 容	(A)	(B)	(C)	(D)	(E)
類 型	意 見	委 員	教 育 人	勉 強	困 る 事
類 型 I	39%	41%	70%	29%	27%
II	31	35	78	30	50
III	31	17	82	47	38
IV	19	38	77	24	57
V	15	40	74	21	35
VI	0	11	47	40	15
VII	0	0	0	80	33
VIII	0	0	0	-	-

あるが、困ることの内容を調べると次のことがあげられていた。

お金がない	13人	不漁である	5人	仕事が多い	5人
雨降り	5人	雨もりする	5人	病人がいる	3人
着物がない	2人	自転車がない	2人	靴がない	2人
学校が遠い	1人	ラジオがない	1人	不景気である	1人
遊び場がない	1人	勉強むづかしい	1人	食が入らぬ	1人
家がくさる	1人	傘がない	1人	マントがない	1人
米がない	1人			計	52人

これら 19 項にわたる困ことは、経済的な原因によるものと、学校生活が順調に送れぬことに原因するものの二つが、大部分を占めている。次にこれらについて、類型や職業との関係をみる。

困 る 事 と 類 型

困 る 事	お 金	不 漁	仕 事	雨 降	雨 も	病 人	着 物	自 転	靴 傘	学 校	ラ ジ	不 景	遊 び	勉 強	貸 入	家 く	マ ン	米 が	計
類 型	が い	だ	多 い	り	り	い る	が な	車 な	な い	遠 い	オ な	気 な	場 な	む づ	ら ぬ	さ る	ト な	な い	
I	3		1	2	3		1				1		1		1	1			14
II	5		2		1	1		1	2	1									13
III	1	2	1	1					1										6
IV	1	1		2		2		1						1					8
V	2	2			1		1					1					1		8
VI	1		1																2
VII																		1	1
VIII																			0
計	13	5	5	5	5	3	2	2	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	52

ここで顕著にわかるのは、拵がりが狭い型、II、V、VIIには、経済的なことがらについて困ることを記入してあるものが多いことである。

又雨が降つたり、雨がもつたり、家がくさつたりすることが困ることとしてあげられているが、これは漁撈収入に影響するものであると共にこの辺では、家の建築が粗末なものであることを示している。

ラジオや自転車がないというのは同じ困ることでも、それ程切実なものとは考えられず、これらの子供は皆、俸給生活者の子供と、理容業の子供である。そこで次に例数の多い職業の子供が困ることを調べてみた。

困 る こ と と 職 業

困る こと 業 職	お 金 な い	不 漁 だ	仕 事 多 い	雨 降 り	雨 も り	病 人 い る	着 物 な い	自 転 車 な い	靴 傘 な い	学 校 遠 い	ラ ジ オ な い	不 景 気	遊 び 場 な い	勉 強 む づ かしい	貸 入 ら ぬ	家 く さ る	マ ン ト な い	米 が な い
漁 業 (34人)	6	5	5	5	3	3	2		2	1				1				1
商 業 (5人)	2										1				1	1		
給 料 者 (5人)	2				1			1	1									
大 工 (2人)	1											1						
無 職 (2人)	1												1					
そ の 他 (4人)	1				1			1									1	
計	13	5	5	5	5	3	2	2	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1

比較的例数の多い漁家の子供が困るとしてあげているうち、ほとんどが経済的なことがらであつて、勉強がむずかしいという一人を除いて全部がお金がない、不漁だ等のことがらをあげている。又家に病人がいたり、着物がなかつたりすることも、小さな学童にとつては、切実な問題であらう。その他の職業については例数が少ないので、その事実を示すに留まるが、商人や俸給生活者の子供は、漁家の子供に比し、困ることとして、自転車がない、ラジオがないということが挙げられている点、それ程経済的な切実さはないといつてよい。

次に困ることを学年別に分類する。

困る こと 学 年	お 金 な い	不 漁 だ	仕 事 多 い	雨 降 り	雨 も り	病 人 い る	着 物 な い	自 転 車 な い	靴 傘 な い	学 校 遠 い	ラ ジ オ な い	不 景 気	遊 び 場 な い	勉 強 む づ かしい	貸 入 ら ぬ	家 く さ る	マ ン ト な い	米 が な い
小 5 (12人)	2		1			1	2	2	1	1	1			1				
小 6 (13人)	1	2	2	3		1			2				1				1	
中 1 (24人)	9	3	1	2	5	1						1			1	1		
中 2 (1人)			1															
中 3 (2人)	1																	1

この表では、中2、中3の例数が少ないが小学生に比べて中学に進むにつれて、困ることの内容が、直接的、個人的なものから、間接的、社会的なものへと拡がっていることが一般にいえよう。

七. 学 業 成 績 と 類 型

これまで、生活構造の拡がりとその内容について8つの型を中心として、研究をすすめてきたが、指導要録の写しをとつたので、学業成績と類型との関係を調べることにする。

このためには学業成績を比較できるようにすることが必要である。それで各教科について評価された5, 4, 3, 2, 1の評点を全教科にわたつて集計し、それを評価項目の和で除した平均値を求めて、これを類型別学童に当てはめた。その結果、次のようなグラフが得られたが、一般に学業成績が上のものは、生活の拡がりが広がっている。即ち成績が普通のものは評点が3になつて表われるとみて3を除いて4,5を(+), 2, 1を(-)として示すと、(-)は各類型にわたっているが、類型(VI)(VII)(VIII)は(+)がなく成績がプラスのものは一人もない。

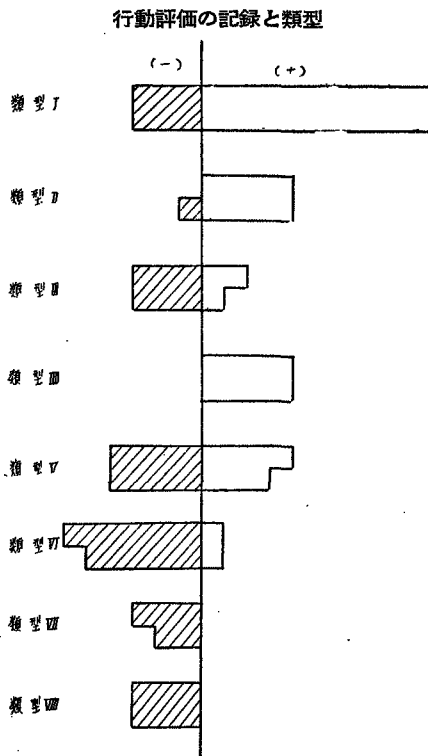
又プラスになっているものが、あらわれるのは (I) (II) (III) (IV) (V) の5つであるが、プラスの偏りが最も大きいのは (I) で (IV) もこれに次いで大きい。(V) と (III) はプラスの部分が極めて少なくむしろ (VI) (VII) (VIII) の型に近い。

(I) 型は拡がりの広い型であり、(V) (VI) (VII) (VIII) の型は狭い型であつたが、以上の点から学業成績と生活の拡がりの間には、かなり相関があるといえる。

八．行動評価の記録と類型

8つの類型と、担任教師の目にうつつた学童の行動の記録を照合することは、所謂バースナリテイとの関係をみることになると思われるが、ここでは指導要録に記載されている行動評価の記録を写して、その評価(小学校は22, 中学校では17)の項目について、17内至22の項目全体が1, 2, 3, 4, 5のどれに最も多く分散しているかをしらべた。そうすると大体の傾向として3に落付くもの、4により多く集つているという

風に分けられた。そこで3を普通として1, 2を(-), 4, 5に偏りがみられるものを(+)としてグラフを、類型別に作つた。そうすると、そこには一定の傾向がみられた。



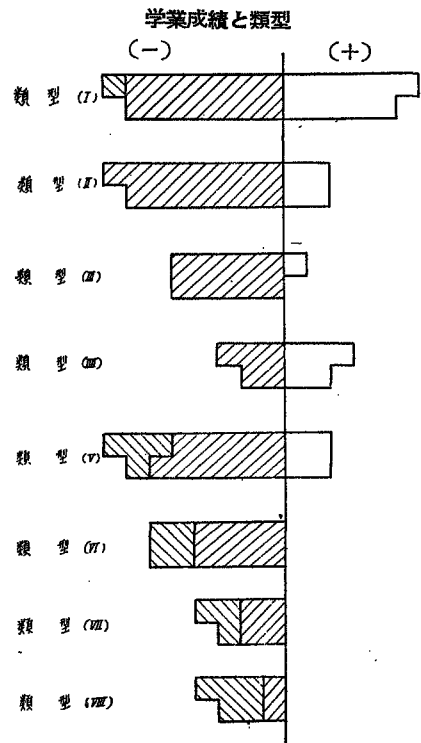
行動記録の上でプラスの方へかたよつているのは、(I) (II) (IV) (V) でマイナスの方へかたよつているのは (III) (VI) (VII) (VIII) である。

ことに (IV) 型はプラスだけである。生活構造の拡がりでは、(I) が最も広いが (I) には、行動記録の点ではマイナスになつているものも幾分が入つている。この点は、社会態度として教師によつて把えられたものと、生活構造の拡がりとの関係が深いといえぬことを示すものとして注意される。

他の類型との関係については、拡がりの狭い型はマイナスにかたよつており、広いものはプラスの部分をもつていて、一つの相関が認められる。

九．結 論

1) 生活構造の差が、どのようにあらわれるかを、



一漁村の小・中学校学童について、生活構造の拡がりの類型化の方法を通じて、分析、解明したが、生活構造の拡がりには、差があり、その差は、主体的、客体的な面から捉えることができた。

これまでの研究を通じて無職保護児童が生活構造の拡がりの狭い型に多く入っていることがみられた。このことは、環境にめぐまれ、ゆたかな生活内容をもっているものは、広い生活の空間の中に生きているが、環境にめぐまれぬ、貧しい家の学童は、不自由な、狭い生活空間に生きていることにほかならない。

職業や階層や、生活程度との関係から、生活構造の拡がりを調べた結果の多くは、このことを説明する一つの手だてである。

ロ) 方法の反省

この調査を実施し、それを整理していつた方法について、二、三の点で一考を要することがらを次に述べよう。ここで行つた方法で一応の纏まつた結果が得られたが、なお、改めるべき点につき今後の研究のために補足することとする。

1. 学年差があるのは、予かじめ予想されることである。従つて学年差をなるべく少くして、同一学年について例数を多くした方が、生活構造の差をみるのに適当である。

2. 生活構造の拡がりがみられるような問を選ぶこと。このためには、その地域、対象の状況を前もつて調べることが必要である。この研究では、学校生活に関する問をもつと撰択すべきであつた。

3. 問の配列を、拡がりをみることができるようになること。従つて身近なことから、間接的なことに及んでゆくように問をえらびそれを配列することが必要である。この研究では8, 9, 10の問の配列の順序が、結果からみて、8, 10, 9の順序にした方がよかつたと思う。

4. 拡がりを全体としてみるためには、それぞれの種類別の問が、或いは3つ或いは4つというのではなく、統一する方が、拡がりをみ易く、整理も容易である。この調査では、3つの種類のものがあり、4つ問のあるものがあるため、整理が面倒であり、その結果、類型化もむづかしかつた。

5. 類型化をするのに、この研究では、拡がりの差をハコによつてみていつたが、拡がりが下底から上へ向うにつれて拡がるというこの考え方のほかに、4で指摘したことを考えると、中心からその拡がりが、そとに向つている、方射状の円を描いて、それをうめてゆくという方法を用いればよりはつきりするであろう。

以上で調査、研究の方法について考慮すべき点を列挙したが、このような研究は、数少ない試みであり、いわば模索の域を出ず、まだまだ、考えねばならぬことが残つている。この点で、この方法をより精密なものにするため、実証的な研究を重ねると共に、その反省、検討を加えねばならないと考えている。

以 上

SUMMARY

The Social Prognosis of the Delinquent Children.

By Saburo Okuda

As the subjects of this study, we preferred the pupils out of the Hokkaido Katei-Gakko, the private training school for the delinquent children. This school was established in 1914 and since then treated 428 pupils up to 1950. Of those pupils, 327 were discharged as the corrected and from these 327 we selected 290 pupils who were above 18 years of age in 1952.

The number of pupils whose present status we could make clear is 165 (57%). According to the results of their prognosis, 111 (67%) have got suitable position in their social living, 33 (20%) are failures and 21 (13%) are not yet stable. Then we analysed these data into many factors comparing the successful group with the failure group to find out what is the dominant factor for their prognosis.

The followings are the results;

- 1) The economical status of their families is not always decisive factor for their prognosis.
- 2) The higher intelligent pupils are better than the lowers.
- 3) The children who are positive and strong in their personality show the good prognosis and the negative and weak do not show good prognosis.
- 4) The pupils who had acquired technical skills are successful.
- 5) The pupils who had a good leader or supervisor at their first employment are good.
- 6) The environmental conditions after discharge from the school are the most dominant factor.
- 7) The pupils who show bad prognosis change their occupation frequently.

Judging from these results, it is very important to carry out the technical and vocational education and to guide them to acquire the positive attitudes in their training.

Concerning the Structure of Living of the Children.

By Hiroshi Ito

This is the study of the "structure of living" and not the study of personality.

The structure of living is built through the accumulation of effects caused by "vor-
hereinander zusammenhang" between a person and his environment.

Then every person has his own "structure of living" and it will appear in various ways.

To clarify these various "structure of living," 187 children at school in a fishing village were examined by 21 questions.

The structures of these 187 children were classified into 8 types by the type of the "structure of living." Each of these 8 types shows a characteristic difference and is correlated with the social status, profession, and the standard of living of the child's family.

The 1st type is most expanded in its sphere of the "structure of living" and on the contrary the 8th type is the most limited.

From the 1st type to the 8th type the sphere becomes smaller and smaller.

The children of the 1st type make the best progress in the lessons at school but those of the 8th type make the least.

The Position of the High School on the Educational Ladder

—Second Report—

By Mantaro Kido

This is the second report on the research carried out as a joint study by the members of the Faculty of Education, Hokkaido University.

The aim of this study is to make clear the character of the present-day high school education and its relation to higher education.

First of all, an attempt was made to find out the subject for future consideration by analyzing the present state of high school education.

For this purpose, investigations were made two times during the past one year.

The first preliminary investigation was carried out in March 1954 to make clear the condition of high school education given to the applicants for admission to Hokkaido University.

The second investigation in July covered 3 high schools at Iwamizawa city in Hokkaido for the purpose of making clear the present state of the scholastic attainments of high school students.

The most important facts found out up to now by this study are as follows;

1. The present-day high school curriculum does not fit students' scholastic attainments.
2. The connection between high school curriculum and that of higher education is inadequate.
3. The entrance into the university of the students from the professional course in high school is becoming difficult.